令和7年度神奈川県私立幼稚園新規採用教員研修会

（鶴見大学、2025．8．1）

発達障害の理解と支援

筑波総合クリニック・筑波大学名誉教授
宮本信也

1

発達障害の区分

2

医療における主な発達障害　（DSM-5-TR、2022）

- 知的発達症　IDD　Intellectual Developmental Disorder
- コミュニケーション症群　CD　Communication Disorders
- 自閉スペクトラム症　ASD　Autism Spectrum Disorder
- 注意欠如多動症　ADHD　Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder
- 限局性学習症　SLD　Specific Learning Disorder
- 発達性協調運動症　DCD　Developmental Coordination Disorder

3

発達障害において顕在化する主な問題

- 能力の問題
  - みんな（定型発達児）がそれほど苦労することなくできているることが同じようにはできない：習得・習熟の問題
  - 言葉、文字の読み書き、計算、運動が苦手など
  - 「遅れ」として認識されるのが通常
- 行動の問題
  - みんな（定型発達児）がやらないようなことを繰り返し行う
  - 一方的な会話、空気を読まない行動、常に動いている（多動）、忘れ物が多い（不注意）など
  - 困った行動として認識されるのが通常

4

中心となる問題による発達障害の区分

- 能力問題が中心
  - 知的発達症
  - コミュニケーション症群
  - 限局性学習症
  - 発達性協調運動症
- 行動問題が中心
  - 自閉スペクトラム症
  - 注意欠如・多動症

5

5

幼児期に能力問題から気がつかれやすい発達障害

6

幼児期：能力問題と発達障害

- 見られる主な問題
  - 言葉の問題：遅れ、会話にならない
  - 同年齢児が一人でできる事柄が一人ではできない
- 考えられる発達障害
  - 中等度以上の知的発達症
  - コミュニケーション症（言語症）
  - 自閉スペクトラム症（ASD）

7

知的発達症

8

知的発達症とは

- 知能の遅れ
- 適応行動の問題：日常生活における困難・問題
- の両者が
- 発達期（22歳まで）に同時に存在している状態

9

知的発達症の重症度

- 4段階に区分
- 軽度・中等度・重度・最重度
- 知能指数だけで判断しない
- 日常生活における支援の必要度も含め総合的に判断
- 参考：知能指数の区分
  - 軽度遅れ：50～69　　中等度遅れ：35～49
  - 重度遅れ：20～34　　最重度遅れ：　～19
  - 境界域：70～84　　年齢相当：85～115

10

軽度の知的発達症と境界知能

- 幼児期に気づくのは困難
- 軽度知的発達症
  - 知的発達症全体の85% → 0.85% → 118人に1人
  - 言葉の遅れはないか、あっても軽度：日常会話可能
  - 日常生活・集団行動はほぼできるが、ときに手助けが必要
  - 学業不振
- 境界知能
  - 頻度は不明：推計学的には14%弱 → 7人に1人
  - 日常会話は問題がない
  - 日常生活・集団行動に問題はないのが通常
  - 学業不振

11

中等度以上の知的発達症

- 中等度：知的発達症全体の10% → 0.1% → 1,000人に1人
  - 運動発達の遅れがあることが多い
  - 言葉の遅れがあるが、簡単な日常会話は可能
  - 日常生活のほとんどに手助けが必要
  - 集団行動・集団遊びとも手助けがあれば可能
- 重度：知的発達症全体の5% → 0.05% → 2,000人に1人
  - 運動発達の大きな遅れがある
  - 言葉の大きな遅れがあり、一語文でのごく簡単なやりとり
  - 日常生活のすべてに手助けが必要
  - 集団行動・集団遊びとも手助けがあっても困難なことが多い

12

幼児期の知的発達症

- 軽度の知的発達症は、幼児期には気がつかれにくい
- 他児と比べて明らかに遅れが見られる場合には
- 中等度以上の知的発達症の可能性が高い

13

13

コミュニケーション症群

14

コミュニケーション症群とは

- コミュニケーション手段の使用や理解の問題
  - 言語的手段（言葉・手話など）・非言語的手段（表情・身振りなど）
- 言語症：言語的手段の使用や理解の問題
  - 言葉の遅れ、乏しい語彙、要領を得ない話し方など
- 社会的コミュニケーション症：コミュニケーション手段の使い方の問題
  - かみ合わない・ずれる会話、言外の意味が分からないなど
- 語音症：発音（構音）の問題
- 小児期発症流暢症（吃音）：話すなめらかさの問題

15

言語症

- コミュニケーション手段のうち言語的手段の習得や習熟の問題
  - 言語的手段：話し言葉、文字、手話など
  - 言語的手段を用いた表現（話す、書くなど）の問題が中心
  - 話し言葉に関しては、理解の問題を示すこともある
- 話し言葉の遅れで表面化する→多くは4歳代までに日常会話可
  - 疑い：1歳半で有意語がない
  - 遅れと判断：2歳で有意語がない、3歳で2語文がない
- 言葉の遅れ以外に伴いやすい問題
  - 語彙と統語（文の構造）の問題
    - 少ない語彙、単純な文、要領を得ない会話、事実だけの短い作文、など

16

幼児期に行動問題から気がつかれやすい
発達障害

17

幼児期：行動問題と発達障害

- 見られる主な問題
  - 周囲が困る行動が多い
    - かんしゃく、手が出る、指示に従わない、勝手な行動
    - 常に動いている、待てない
  - 周囲との関わり方の問題が多い
    - 一方的な対人行動、しつこい
    - 話さない、遊びに入ってこない、集団活動になじめない
- 考えられる発達障害
  - 自閉スペクトラム症（ASD）
  - 注意欠如多動症（ADHD）
  - 中等度以上の知的発達症

18

自閉スペクトラム症 （ASD）

19

自閉スペクトラム症とは　（DSM-5-TR）

- 社会的コミュニケーションと対人相互行動の問題
  - 社会的あるいは情緒的な相互交流行動の問題
  - 非言語的なコミュニケーション行動の問題
  - 対人関係の確立・維持・理解の問題
- 限定された行動、興味、活動の反復
  - 常同的な運動や遊びの反復
  - 同じことや特定の事柄への過度の固執や執着
  - 感覚刺激に対する過剰な、あるいは過小な反応

20

自閉スペクトラム症とは：かみ砕くと

- 状況や場にあったやりとり行動が困難
  - その場の状況や雰囲気に応じて行動を変えられない
  - 表情や言葉から相手の気持ちをくみ取ることが苦手
  - 友だち関係が続かない、同年代の子どもとのやりとりをしない　など
- 限定された行動、興味、活動の反復
  - 同じ遊びや活動を繰り返して行う
  - 気に入ったあるいは気になる事柄への執着
  - 特定の感覚刺激を強く嫌がる　など

21

ASD幼児の困難さ：知能障害を伴う場合１

- ～３歳　・・・・・　主として家庭
- やりとり行動の問題
  - 視線が合わない、名前を呼んでも反応しない、母親がいなくても平気、人見知りをしない（ときに過剰な人見知り）
  - 言葉の遅れ、反響言語、独り言が多い、指さしをしない、会話にならない
- 限定された行動・興味・活動
  - 常同的な運動や遊び、つま先歩き、通常子どもが関心を持たない物事への過剰な関心、極端な偏食　など
- その他
  - 些細なことでのかんしゃく、場所見知りが激しい　など

22

ASD幼児の困難さ：知能障害を伴う場合２

- ４歳～６歳　・・・　集団・家庭
- やりとり行動の問題
  - ３歳までの状況　＋
  - 一人遊び、一人抜け、他児へ関心を示さない、集団行動からの逸脱
  - 簡単な会話は可能だが、話題がずれる・かみ合わない　など
- 限定された行動・興味・活動
  - ３歳までの状況　＋
  - 確認行動、予定・環境の変化で不安定になる、特定の音への過剰な反応など

23

ASD幼児の困難さ：知能障害がない場合１

- ～３歳　・・・・・　主として家庭
- やりとり行動の問題
  - 母親がいなくても平気、人見知りをしない（ときに過剰な人見知り）、初対面の人への話しかけ
  - 言葉の遅れはないかあっても軽度、多弁、一方的な会話、場に合わない事柄をいきなり話し出す　など
- 限定された行動・興味・活動
  - 通常子どもが関心を持たない物事への過剰な関心、融通が利かない、極端な偏食　など
- その他
  - 些細なことでのかんしゃく、場所見知りが激しい　など

24

ASD幼児の困難さ：知能障害がない場合２

- ４歳～６歳　・・・　集団・家庭
- やりとり行動の問題
  - ３歳までの状況　＋
  - マイペースな言動、一人抜け、自分がやりたいことの主張、集団行動可能だが練習を嫌がる　など
  - 一人で話しまくる、理屈っぽい、大人びた話し方　など
- 限定された行動・興味・活動
  - ３歳までの状況　＋
  - 一番・勝ち負けへのこだわり、確認行動、予定・環境の変化で不安定になる、特定の感覚刺激への過剰な反応　など

25

ＡＳＤ児の多くは「自閉的」ではない

- 昔の自閉症イメージ（一人の世界）通りのASDはいる
  - しかし、それは少数派
- ASD全体では知能障害のない人の方が多い
- そして
- ASDには、いろいろなタイプがある
  - 周囲に関心を示さず一人でいる
  - 人見知りせず、誰でも平気で話しかける
  - 働きかけには応じるが、働きかけがなければ好きなことをやっている
  - 一見、人に気を遣っているようにみえる
  - 不安が強く、慣れるまでは何もしない　　など

26

ASDの子どもたちに見られやすい特徴のいくつか

- 具体的に示されていない事柄を推測して考えることが少ない
- 言葉の意味を最初に覚えた意味でいつも考えがち
- 毎日の生活の中で何度かやるうちに自然に覚えてしまう事柄が身につきにくい

27

ＡＳＤの特徴から生じる困難　Ⅰ

- 具体的に示されていない事柄を推測して考えるのが苦手
  - その場に示されていない言葉や事柄を推測して考えない
  - 示された言葉・事柄だけで判断してしまう
- こちらが話したことに、思いもかけないような言葉が返ってくる
- 言われた言葉をそのままに受けとった反応や行動をする
- 冗談・比喩や皮肉が分からない

28

ＡＳＤの特徴から生じる困難　２

- 言葉の意味を最初に覚えた意味でいつも考えがち
- 言葉の意味を状況に合わせて考えることが苦手
  - 注意が必要な言葉
    - 状況で意味が異なる言葉
    - 形容詞など具体的な事ではなく、いろいろなイメージ・受け取り方がある言葉
    - 集合名詞などの抽象語　など
- こちらが思っていた意味で伝わらない
  - 何度言っても言われたことをやらない
  - 突然、意味不明なことを言う
  - 何か話がかみ合わない

29

ＡＳＤの特徴から生じる困難　３

- 毎日の生活の中で何度かやるうちに自然に覚えてしまう事柄ややることの流れが身につきにくい
- 場に合わないちぐはぐな言動を行う
  - 通常当たり前と思われていることが分かっていない
  - 見れば分かるだろう・言わなくても分かるよね（常識）が分からない
  - 何かをするときの一連の流れが分かっていない
    - 毎回、同じことを言わないと動かない

30

ASDのある子どもで気をつけること

- きちんと全部のことを言わないと伝わりにくい
  - 省略をしない完全な文章で話す
- 何度言っても言われた通りにやらない場合、「言うことを聞かない」のではなく、こちらが使った言葉や表現では、子どもに伝えたい事柄が子どもに伝わっていない可能性を考える
  - こちらが言ったことを子どもがどのように理解したか確認する
  - 子どもの応答があいまいな場合、伝えたい事柄をやって見せながら、言葉でもう一度説明する
- すでに何度かやっていることでも、やり方や流れを分かっていないことがある
  - やることや流れを毎回、説明する

31

31

注意欠如多動症（ADHD）

32

注意欠如多動症とは

- 発達段階に比べて不相応なほどの多動・衝動性、不注意
- 多動：じっとしていられない
- 衝動性：待てない
- 不注意：興味の有無で集中度が大きく変化する
- 参考：興味がないことへの幼児の集中時間
  - 年齢あるいは年齢＋１分：4歳児は4分、5歳児は5分、6歳児は6分

33

ADHD幼児の困難さ

- ～３歳　・・・・・　主として家庭
  - 多動・衝動性を背景とする行動
    - 動き回る、いなくなる、何でも触る・いじる（落とすなどで結果として「壊してしまう」）など
- ４歳～６歳　・・・　集団・家庭
  - 多動・衝動性を背景とする行動
    - 同上、集団における勝手な行動、他児とのトラブルなど
  - 不注意（無頓着）を背景とする行動
    - 話を聞いていない、取りかかりが遅い、忘れ物・なくし物が多い、切り替えができないなど

34

ＡＤＨＤとＡＳＤ

- ADHDとASDの両方の特徴を持っている子どもが少なくない
- 両方の特徴がある場合
- 幼児期は、ADHD特性の問題が目立つが、マイペースさや言葉の通じなさが混在
- 小学校後半からASD特性の問題が中心となっていく

35

35

幼児期に気がつかれることがあるかもしれない発達障害

36

幼児期に気がつかれることがあるかもしれない発達障害

- 見られる主な問題
  - ひらがなの読みを覚えられない・読むのが遅い、ひらがなを書けない
- 考えられる発達障害
  - 限局性学習症：読字障害、（書字障害）
- 見られる主な問題
  - 着替えができない、園でのあらゆる行動で不器用さのため手伝いが必要
- 考えられる発達障害
  - 発達性協調運動症
    - 生活に支障を来すほどの不器用さ

37

発達障害のある子・疑われる子
幼児期の支援で心がけるとよいこと

38

幼児期の対応で望ましい姿勢　１

- 診断名にこだわらない
  - 目の前の子どもの気になる特徴に合わせた対応を考えるのでよい
- 言葉の理解がよくないな　と感じたら
  - 知能の問題の有無にこだわることなく
  - 言葉の理解に配慮した対応を行えばよい
- 友だちとの関わりが悪い、こだわりが強いなと感じたら
  - 自閉だろうかと考え、専門機関相談を考えるだけでなく
  - 自閉の特徴のある子どもへの対応を始めればよい

39

幼児期の対応で望ましい姿勢　２

- 発達障害特性のある子どもは、いろいろな事柄ができるようになるのが、定型発達の子よりも時間がかかる
- 卒園までに、できるようにしなければ
- ではなく
- 将来できるようになるときまで
  - 私たちが手助けすることで（一人でできることを目標にしなくてよい）
- 大きなトラブルなく、みんなと一緒に活動できる機会が少しでも増えればいいと考えるのでよい

40

幼児期の対応で望ましい姿勢　３

- 今のうちになんとかしなければ、将来困るだろうという意識は持たない
- 発達障害のある幼児が
- 幼児期に、自分の発達特性をカバーする知識やスキルを身につけることはできない
- 最も大事なことは、気持ちが安定して就学すること
- 卒園のとき、『幼稚園が楽しかった』『小学校に行くのが楽しみ』と子どもが話していたら、園での対応は悪くはなかったと思ってよい

41

プラスもマイナスも含めてまるごと

- 子どもは
- 自分のよいところもわるいところも
- 丸ごとそのまま受けとめてもらえている
- と実感できることが、心の安定につながる
- このことは、発達の特徴がある子どもでも、愛着の問題がある子どもでも、心の傷を抱えている子どもでも、みんな同じ

42

将来も大切ですが　今も大切

- 子どもたちは、誰でも
- 将来のためだけではなく、今日、今を幸せに過ごす権利がある
- 私たちが考えることは
- 今日の１日が終わるとき
- 子どもが
- 今日は楽しかった、明日も楽しみ　と言える日を
- １日でも多くしてあげること　ではないでしょうか

43

幼児期に気づかれることがある発達障害のまとめ

- 気がつかれやすい発達障害：先ずこの4つについて理解を
  - 中等度以上の知的発達症：言葉といろいろな活動の遅れ
  - 言語症：言葉の遅れ
  - 自閉スペクトラム症（ASD）：マイペースでしつこくかんしゃく持ち
  - 注意欠如多動症（ADHD）：じっとしていないけれど子どもっぽい
- 気がつかれるかもしれない発達障害
  - 読字障害：ひらがなを読むのが遅い（他児の倍以上の時間）
  - 発達性協調運動症：すべての動作・活動が不器用

44

【参考】

発達障害特性への配慮例

45

ことばへの配慮　１

- 話している内容を一つの事柄に子どもが限定できるように話す
  - 単文を中心とし、複文、重文は基本使わない
  - 一回の文で話す内容を一つに絞る
  - 具体的表現を用いる
  - 主語と目的語を付けた完全な文章で話す
- 幼児に分かりやすい話し方を意識する
  - 主語＋目的語＋述語の順番
  - 倒置文（目的語＋主語＋述語）や受身文は避ける
- 穏やかで丁寧な話し方を意識する
  - 「ですます調」が望ましい

46

ことばへの配慮　２

- 代名詞は指示する名詞を付けて使う
  - 「それ」ではなく、「そのコップ」
  - 「この前」ではなく、「先週の水曜日、9月21日」
- 命令形・大声を避ける
  - 「～しなさい」ではなく、「～しようね」など
- 肯定的表現・用語で話す
  - 否定的表現は使わない：だめ、違う、変だ、おかしい、など
  - 「間違ってる」ではなく、「そこをこんな風にしてみたらいいよ」など

47

ことばの理解を伸ばすための配慮

- 子どもの活動を言語化
  - 子どもが見たり、聞いたり、やっていることをことばで表現
  - 「ほら、車が来たよ、青い自動車だね。速いね。」など
- 子どもの気持ちを言語化
  - 子どもが感じていると思われる気持ちをことばで表現
  - 「楽しいね」、「嫌なんだよね」など
- 拡大模倣
  - 子どもが言いたいだろうなと思われることや、子どもに言って欲しいことを、こちらが言い、さらに、その応答も言う
  - 一人二役、子どもに言わせる必要はない
  - 「お菓子、おいしそうだな」「食べていいですか」「はい、いいですよ」「わーい」「おいしいなぁ」など

48

集中ができるように

- 「時間」の統制を考える
  - 子どもが集中できる時間の組み合わせ
- 子どもの集中時間に合わせた課題設定
  - 量の調整：集中時間内にできる量　など
  - 難易度の調整：集中時間内にできる難易度　など
  - 課題内容の調整：集中時間に合わせて交換　など

49

49

気が散らないように

- 情報・刺激の統制
- 必要な情報を分かりやすく提示
  - 単純化：一度に一つなど
  - 明快化：板書の文字の色を変えるなど
  - 構造化：情報の関係の視覚化など
- 要らない刺激を取り除く
  - 必要ないものを片付ける・見えないようにするなど

50

50

動いてしまう・待てない状況への配慮

- 動いてしまう（多動）
  - 活動エネルギーの事前消費：大事な活動の前に一緒に運動するなど
  - 「合法的に」動かす：簡単な用事をお願いしてその場から動かす
- 待てない（衝動性）
  - 待つ時間にやることを提示：簡単な作業の依頼、本人が好きな活動など

51

51

読み問題が疑われる場合

- 文字学習における配慮
  - 文字を大きくする
  - わかち書きにする
  - 一緒に読んであげる
  - 子どもが興味を持っている事柄と関連させた単語や内容を用いる
  - 可能なら、多層指導モデル（MIM）を活用
- 幼児期に読み障害を診断することは困難
  - 保護者には、就学時に学校担任と相談することを勧める

52